



片隅の同時代史：軌跡・1919～1983

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003654

片隅の同時代史

—軌跡・1919～1983—

服 部 正

I. 「新しき村」考

大正8年(1919年)の年表からアトランダムに拾って見ると、ベルサイユ講和条約、ワイマール憲法、ILO8時間労働制採択、原敬内閣の物価政策に憲政会反対、松井須磨子没、和辻哲郎「古寺巡礼」、河上肇「社会問題研究」創刊など。第一次大戦後ブームの年である。

この年11月23日、東京市北槇町11番地に出生。(己未、九紫火星、射手座、人馬宮ということになる。但し、私は運勢判断の類をいっさい信じないが。)

父竹内玄^{はるか}、母深雪^{みゆき}の長男、ひとりっ子である。その時の本籍は石川県江沼郡大聖寺町30番地、父系は加賀大聖寺藩士、代々武芸と茶道に長じたという。

曾祖父の竹内吟秋^{ごんしゅう}は、竹裡館^{ちくりかん}、心水軒とも号し、剣術、槍術の達人、維新後陶芸を学び金襴手^{きんらんて}とくに青絵九谷の名手として美術史上の人物となる。文人、画家としても知られた。その弟が相鮮亭^{そうせんてい}一毫^{いちごう}で柔術、砲術に秀で、赤絵九谷金襴手の名匠として併称される。

吟秋の長男すなわち祖父は竹内師水、漢学者、書家、剣術にも長じ、陶宮術という一種の神秘的修養結社(?)の教祖的存在となり、多くの著述を世に問う。玄はその長男で青年期は洋画に打ち込み、親友田辺至と共に藤島武二に師事した。一橋卒業後、貿易商を経て兵庫県明石郡垂水村(現神戸市垂水区)へ居を移し、地域開発に着手。私の3才(以下満年齢)頃のこと。武者小路実篤の「新しき村」建設が私の出生の前年、母との結婚の年で、「白樺」創刊は父の一橋卒の年だ。幼い私もユートピアだの、理想郷だのという言葉覚え込む。

母は遠祖が巖島神社の神宮とかで宮島姓。(本籍は新潟県) 実業家の家庭に

育ち、上野の選科で声楽を学び、館山漸之進^{ぜん}について平家琵琶を修めたとか。「平家音楽史」に若き日の写真が載せられているときいたが稀観本^{きこう}で未見である。

広い庭に松露^{しょうろ}や松茸ができ、竹箴があり蝮も潜み、庭続きに狐の穴があり、池に水雞^{すいけい}が鳴いた山荘で、米国製のランプの下、不二屋の輸入するラクトーゲンを飲んで育った私は、英国種のセッターなど10匹以上の犬が友達だった。洋画家への道をあえて避けた父と、声楽家への道を心ならずも断念した母とは、その共通する芸術的資質のゆえに反発し不和であり、幼年期の私の深層心理に暗い翳を落す。

大正15年（'26）垂水村立尋常高等小学校（現神戸市立垂水小学校）入学、蠟石の石筆、黒い羅紗を巻いた石盤拭き。2年生ではノートを使ったから、石盤を知っている最後の1年生ではなかったろうか。ほとんどの同級生は着物で、ランドセルに洋服の私は最初から異邦人のごとくであった。

年末に大正天皇“崩御”、昭和と改元、黒リボンの喪章をつけて登校、放任主義の父と対照的に超過保護の母で、或る意味では私は両親からの被害者だった。病気で休みがちな私の家へ担任の内橋一真先生が忍耐強く“訪問教師”の役割りをつとめて下さる。

学芸会のプログラムの中にレコード鑑賞があって、幕があくと机の上に蓄音機、先生がひとり腰かけている。レコードが終ると立ちあがった先生は、重々しく裏返しグルグルとハンドルを廻してネジを巻く、……講堂のござの上に座った親たちはシーンとそれを見守っている。鮮やかな記憶をとどめている光景だが、あのグルグルという音もまた同時代史のひとつの小さな回転の響きだったような気がする。

「児童文庫」「小学生全集」の世代で、3年生の11月、御大典（天皇の即位礼）があり、兵庫県の記念展覧会に作文と絵画が入賞した。図画と理科の得意な小学生だった。「明治大正文学全集」の拾い読みを始めるのは5年頃のこと。卒業の前年が満州事変——いわゆる15年戦争の発火点となる。

昭和7年（'32）県商と呼ばれた兵庫県立第一神戸商業学校（現県立神戸商業高校）入学。校長は父と一橋の同窓。土地開発計画の一環として、県商や、

高商（現県立神戸商大）に対し土地提供による誘致の機縁を作ったのが父という浅からぬ関係もあってのこと。2年までは副級長をつとめたが、しだいに校風になじめなくなる。芥川龍之介の大導寺信輔のように学校を憎み始める。校則に「小説稗史ノ類ヲ読ム可カラズ」という1行があったが、その「小説稗史ノ類」を耽読する。算盤にカビをはやし、珠をはじくたびに青臭い匂いがして大目玉を喰う。

卒業の前年、二・二六事件。その頃は軍事教練最優先の時代になってくる。成績振るわず同級生からも孤立、俳句を作り、新聞に投句したりしてひそかに楽しむ。暗鬱な思春期。

II. Scarabeus Sacer

昭和12年（'37）卒業、高商（旧制専門学校）受験を放棄、両親の心配をよそに読書と原稿に没頭。7月蘆溝橋で日中両軍衝突、日中戦争（支那事変）の開始。愛国行進曲発表。後年、研究生生活に入ってから、遂にこの空白の1年間の読書量をこえることはなかったように思う。南京大虐殺も知らず、この年出た川端康成の「雪国」、島木健作の「生活の探求」などを次々。

確かその頃華北の戦場で匍匐前進中の若い兵士が、眼の前を糞のボールをころがしてゆく“たまこがね”に見とれてしまったという記事を読み、胸が熱くなった記憶がある。岩波文庫の「フェブル昆虫記」は戦火の拡大をよそに次々刊行されていた。兵士が見つけたのは、“^{ひじり}聖たまこがね”（朝鮮たまこがね）ではあるまいか。昭和5年（'30）刊の文庫第9分冊は、Scarabeus Sacer（スカラベ・サクレ、甲虫類の1種）に頁をさいている。彼に激しく共感すると同時に、「西部戦線異常なし」の蝶を見つけた兵隊のような運命にあわねば良いかと思った。それは知性の哀しみとでもいうべき、ほとんど青春そのものの暗さと等質の感覚だった。だがそれだけではデモニーッシュな力にはならなかった。20代の始めにかけて批判精神は人一倍、培われていったが、軍国主義下の現実はあまりに強大で、なすすべもなく不安ばかりがつる。

昭和13年（'38）関西学院専門部文学部英文学科入学。高校（旧制）へ行きた

かったが、その頃は中学（旧制）以外からの進学は事実上不可能だった。母は私の文学志向を支持し、渋る父を説得してくれる。

ドイツ軍のポーランド侵入、第二次世界大戦勃発は昭和14年（'39）2回生の時で、この年満20才となる。英米人教授の多いミッション・スクールも、急速に軍事教練強化。しかし、この学院で英語英文学のみならず、キリスト教文明への眼をひらく。竹中郁をたびたび訪ねる。3回生頃「短歌研究」の前田夕暮、石原純選に投稿しきり。

純粹理性批判——情慾は何時か此の独逸文字の整然たる退屈を淫らに侵してゐた。

——というような入選歌を今見ると、何とも苦笑のほかはない。平岩米吉の動物文学会に入る。幼い頃からの動物好きが、ウィリアムスの「鮭サラー」のような本格派にたどりつく。精神分析学にも興味を持つ。自動車学校へも通う。

昭和16年（'41）、関西学院大学法文学部入学、文学科英文学専攻。この年12月、米英と開戦いわゆる大東亜戦争となるのだから、英文学はすでに勇気のいる選択であった。専攻者は僅か数人。気負いたってペダンティックであろうと努めたかの観ある時期だ。毎日、古本屋巡りをする。

III. 旋回と鍵鑰

自分の部屋はいつしかペダントリィの小宇宙になっていた。祖父師水の遺したおびたしい漢籍は父が相続（？）したが、その中から唐本の「金瓶梅」を見つけ、鷗外の「雁」の岡田ではないが、何とか読みこなす。漢詩のまねごとも試みる。レクラム文庫の何冊か、神戸のトムソン商会で掘り出したテンプル・シェイクスピア、国貞の錦絵にオオマァ・カイヤムの英訳版、細心の人工的乱雑さを以て配置したそれらの書物の真中で、上海経由の禁制品のMCCをくゆらせながら、同じく禁断の書のアドラツキイ版の何だかを開く。思い出しても齒の浮くような鼻もちならぬ酩酊の季節で、おのれの毒には気づかない。第一、そうした戦時下にあるまじき贅沢が親の経済力のおかげという意識さえほ

とんどない。とくに母は終始私の学芸の庇護者だった。

社会科学書が次々発禁になってゆく頃で、高島訳「資本論」は早く入手したが、「発達史」「機構」「分析」（野呂栄太郎「日本資本主義発達史」、平野義太郎「——社会の機構」、山田盛太郎「——の分析」などは苦心の末購入。「分析」が7円だったかで、何しろ50銭あればちょっと楽しめた頃だから、さすがに親の顔色をうかがう。旋回基軸だの、鍵鑰産業だのという難解な字面に、丁度「碧巖録」や、「正法眼蔵」を開いた時と同じような感覚で呪縛された。切支丹文学にも凝って、Tadaxi Taquevchi とサインして悦に入る。

卒論にハママン・メルビルの「白鯨」を選んだのも、神戸らしく海洋文学をと思い立ったのと、未だ研究書の乏しかった頃で海濱錯雑なその文体に挑戦しようという客気も手伝ってのことだった。文楽、歌舞伎にも通う。淡路の賀集村に吉田伝次郎座を訪ね、遂に天狗久の頭を入手する。両親もこの時は大喜びしてくれた。その晩は座頭のいいつけ通り、切火で潔めて頭を飾る。

小学校の同級生和田実君（現、神戸大学教授）と、よく趣好をこらして芝居の本読みの真似ごとを楽しんだのも懐しい。和田君の友人の内海洋一君（現、大阪大学教授、姫高事件と呼ばれた治安維持法事件から釈放後のこと）と共にシュベルゼンツというドイツ人の女性のところへ会話を習いに通ったりした。しかし、もはや日常会話の中でさえ、思想的なことは、かたく口をつつまねば危険な時代になっていた。

それにしても矮小なデモンであったことよ。

学徒戦時動員体制確立要綱なるものが発表され、突如卒業は半年くりあげ昭和18年（'43）9月20日ときまった。英文の卒論の完成をいそぎ、徹夜を続ける。

卒業式には全学の首席総代となる。

IV. 青いほむら

やがて24才。卒業して間もない11月、参謀本部嘱託となり、乳ガン手術後の母を気づかいながら上京、2部6課南東班勤務。南東太平洋の米英情報担当班

である。市ヶ谷の大本営陸軍部へ通勤。地下資料室で始めて南京大虐殺その他の凄さまじい惨殺死体の記録写真などを見て衝撃を受ける。東條首相、杉山參謀総長なども瞥見する。

下宿では翻訳に深夜まで取り組む。或る夜、電報。——階段を一気かけ降りる。陸軍の召集は来ぬはずであったが、海軍からだった。昭和19年（'44）5月5日臨時召集により舞鶴海兵団入団即日充員召集。（海軍補充兵役）学徒出陣の一期上の学年で、戦中派中期の私たち大正8年（'19）生れは、手ひどい犠牲を受ける。（同窓会名簿の物故者、行方不明者半数以上。）

神戸の自宅へもどると伏字だらけの社会科学関係の発禁本や、書きちらした原稿類を焼く。松葉が爽やかなしめりを帯びた白い煙と化してゆく、その香りと共に、書物が乾いた炎をあげる。秘蔵の春画も1枚、1枚炎の中へ投じた。美女たちの淫猥な歓喜の表情が青いほむらのなかに消える。辛うじて保たれていた日常性、不完全ながらの自分の時間が、今、巨大な権力によって断ち切られるのだと思う。眼にみえぬ国家の荒々しい息づかいを身辺に感じた。書斎のオクスフォード・ポエツの一群の金文字の背のあたりへ、「学芸の子は不滅不死」となぐり書いた紙片をはりつける。死にたくない、しかし死はすでに明日に迫るように思えた。

舞鶴海兵団から間もなく鳥取県的美保航空隊へ、そして8月、軍令部直属の埼玉県大和田通信隊へ転勤。（映画「日本の一番長い日」の冒頭に出てくる敵信傍受の情報部隊。）

昭和20年（'45）4月14日、母深雪の死により一時帰休。列車は空襲下たびたび立往生、辛うじて往復する。私の属したV作業は、在米「二世」だった士官、下士官集団で、互いに英語でささやき合うような独特な雰囲気。特話員と呼ばれる彼らは、攪乱のため米軍潜水艦にも超短波で話しかけた。情報の闘いだった。沖繩戦、そして大和の沈没、刻々米軍の超短波をなまなましく聴く。戦争は終るだろう、それからの世界はどうなるだろうか、武蔵野の地下耐弾室で、真剣に考えた。ディレッタント的態度で独習したに過ぎぬ社会科学的思考が、この時は役に立った。ポツダム宣言受諾の動きを、おそらく最も早くキャッチした通信隊だ。息を殺す想いで米軍の電話、放送を傍受。ああ、生還

できると思った。

何日か前に大和に乗り組んだ特話員の運命を想う。私の最後の身分はV作業要務士官心得という、海軍でもそこだけのものだった。

復員、参謀本部も、むろん廃止による解囑。父の事業はすべて戦争のため没落、実業家として再起し得ず不遇の晩年を迎えることとなる。

V. 戦中派中期・無頼派

“焼跡闇市時代”——私は自由と解放感で足どりも軽かった。間もなく26才、暴力的の雰囲気漂わせる無頼派だったと後日評された。

12月、京都の国際女性社という小出版社設立に参画、理事兼編集長の肩書き、岡山県の谷崎潤一郎の疎開先を訪ね、原稿を頼み入浴をおすすめる。

昭和21年（'46）4月、関西学院専門学校専任講師となり、英語担当、一年間勤務。出版社は退社。その年8月、神戸で夏期大学水曜学会開催にかかわり、服部清美と出会う。やがて共に日本基督教団栄光教会で洗礼を受け、翌22年（'47）2月16日結婚式。清美は父誠一、母ふじの長女。（本籍京都市、神戸市出生）

改正直後の民法75条「称氏の自由」により妻の氏を選ぶ。今にして想えば^{ひつそく}逼塞してはいたが、ひとり息子の改姓を平然と認めた父こそ、明治のリベラルそのものではなかったか。父の従弟梶井剛（当時、東海大学総長）などから批判の来信を受ける。妻の氏を称することに深い意味はなく、「称氏の自由」も戦争から解放された新民法のひとつの“権利”なのだから、一度行使してみようかと思ったていどで、火野葦平のように男性的作家が妻の姓を名乗る例もあるのだから面白い、と無頼派らしく考えたのだ。

VI. 学芸梁山泊

兵庫県立労働研究所創立のことを聞き、川口義明所長に面接したのは昭和22年（'47）9月。即決入所、まず進駐軍の軍政部から届く英文資料の翻訳、紹介を担当。しばらく文学離れする必要を感じていた。とかく文学が弱者の弁護者

となることへの懐疑があった。

労働基準法制定後間もない、片山内閣の頃で、血の騒ぐ季節。英米文学の世界だけでは物足らなかった。同時代史の激流に身を投じて見たかった。文学を捨てるのではなく、文学を社会的、歴史的に深めるのだと自負しての研究所入りで、後年大学長や、学部長になったような人たちが、いずれも20代か、30代半ばの若さで次々入所していた。イデオロギイ論争は激しく、さながら学芸の梁山泊のおもむきがあり、経済学は全く独学の私も、切磋琢磨の中で、しだいにきたえられる。

資料室開設準備、軍政部ラッツ大尉らの支援を得て資料蒐集活動、初代の資料課長となる。（資料室はその後変遷を経て、現在の兵庫県労働経済研究所に、その充実整備された内容を誇る。）

川口所長の「実学」的学風の影響を受け、米英の文献を次々読破しながら、労働文化、生活文化領域の開拓に着手。（共に、当時一般的に使われていなかった概念。）また機関誌「兵庫県労働時報」改題して「労働研究」、姉妹誌「兵庫県労働調査資料」などの編集兼発行人となり、占領下の困難な状況の中で悪戦苦闘を続ける。

昭和24年（'49）3月、神戸医科大学付属高等看護学院講師になり、その後、兵庫県立看護学院、厚生女子専門学院などと制度が変わるが、13年にわたる講義を通じ、医療看護関係の現場に深く入り込む機会を得た。

この年には、研究所の多忙な勤務のかたわら、5冊の英文学編註書を出版。妻もオルコットの「リトル・ウィメン」の訳書や編註書などを出す。

11月30日、長男俊介が生まれ、住居も垂水区西垂水町から兵庫区馬場町の県営住宅に移る。私は30才になった。

同年秋、大阪社会事業学校四宮恭二校長より、短期大学創立準備中であるが専任として来る気はないかとのおすすめを受ける。研究所から先に同校へ移っていた山本開作君（現、大阪市立大学教授）の推挙による。専任になると進駐軍を通じてララ物資（救援物資）の背広一着分の生地を支給されるということで、「今、すぐ承諾してもらえらるなら、これをあげられるのだが……」といわれた。（嘘のような話だが、それほど物資不足で困窮していた時代のこと

だ。）研究所からは強くひきとめられ、とりあえず非常勤講師でとお答えした。

大阪市南区の田島町学舎の社会事業学校でも特別講義をした。しかし、短大講師になるためには、戦時中の言動が追放に該当しないことを証明して、教職適格確認書を受けねばならない。ついで文部省大学設置審議会へ資格審査申請をする。文学、英語で講師合格の認定を受ける。

前身校の社会事業学校はアメリカ並みにポスト・グラデュエート（大学院）を標榜していたくらいだから一流の講師陣。英語は兼弘正雄（元大阪商大教授）という大先生だったので、その後継者たることを光栄に思った。

昭和25年（'50）4月1日大阪社会事業短大開学と同時に非常勤講師発令、講義に行くと、なるほど伊藤博教授も、孝橋正一教授も同じ生地の背広。ハハハあれがララ物資かと内心思ったものである。

翌昭和26年（'51）再度文部省の審査を受け、今度は社会事業技術論、労働文化論、文学について助教授A級合格となる。労働文化論は文部省による日本最初の公認科目となったわけで嬉しかった。しかし、研究所ではなおひきとめられ、遂に「願により自今俸給を支給せず」という兵庫県知事の発令を受け、籍を残すことにして、5月1日付で大阪社会事業短大助教授の辞令を受ける。これより5年半、研究所員の籍も存続し、昭和31年（'56）漸く名実共に退職、改めて兵庫県嘱託となった。いわば身分上の二重国籍者としての時期が続く。

VII. “社会事業のメッカ”

創設期の大阪社大の教授会は、座談の名手の四宮恭二学長の下、牧歌的雰囲気漂わせていたが、論争もよく起ったし、イデオロギイ分布も研究所同様多彩だった。ここもまた草分け時代は一種の学芸の梁山泊であったのだ。

短大制度そのものが誰にも未経験なのだから、規則とか、内規とかは、すべて前例もなく白紙から起案せねばならぬ。短期間ながら公務員生活経験のある私は、しばしば原案の起草者となる。後年、時にその不備を指摘されたが、当時は零からの出発で試行錯誤をかさね苦勞した。とにかく生きた福祉現場に近づけるだけで嬉しかった。すべて人間へのインタレスト……。

それまで他の国公立大学からの誘いもあったが、研究所を離れたくなかった

のは、労働問題の現場をよく知りたいがためであり、大阪社大を選んだのは社会福祉の現場に入りたくなったからである。大阪社大こそは“社会事業のメッカ”という声がよく出た。（社会福祉という用語が、一般的でなかった頃だ。）

専任になって間もなくの7月、学内に社会問題研究会が組織され「社会問題研究」を発刊、臆面もなく創刊号に執筆。発表機関の極度に乏しかった時代で、この雑誌で業績を活字にできるということを就任快諾の理由にあげた人もあった。

続いて昭和27年（'52）10月25日、創立3周年記念学術講演会と銘打って東畑精一博士を招き、私はその前座（「大衆娯楽と社会」）をつとめる。（大阪朝日新聞講堂）社会福祉主事認定講習への出講も他府県へひろがる。

さて、以前から労働教育、社会教育（成人教育、婦人教育、青少年教育など）の領域の活動範囲はしだいに拡大しつつあったが、神戸ユネスコ協会始め、兵庫県下の文化団体、市民団体などの結成、発足にもかかわる。芸術文化団体半どんの会なども結成準備に集ったひとり。

研究所時代から兵庫県立労働短期大学設置を提唱（後に兵庫県労働学院として実現）していたが、この運動の拠点をも市民同友会という社団法人に持ち込み、一挙に促進をはかったのが同年3月のことで、実はこれより早く大阪社大の産業福祉学科増設構想の資料としても、この労働短大私案を提供した。

また同年6月には「鉄の肺をつくろう」というキャンペーンの中心となり、市民同友会を再び拠点とする。ポリオなどによる呼吸筋麻痺の臨床治療に使う鉄の肺が進駐軍病院以外になく、ある少女を米軍々医が緊急入院させて救ったという“美談”報道に対し、美談の生れる必要がないように、鉄の肺を購入しようと呼びかけたもの。「私は鉄の肺に入れなかった少年の死を目の前にみた。そして入ることを許された少女もみた。」「美談は宝石に似ている。稀少価値によって貴い。闇の中に宝石の輝きの一層さえるように、爽やかな美談のオアシスにいだき寄せられる機会のなかった数多くの人たちは、限りない絶望の砂漠に死なねばならぬ」という大時代な文章に対し、新聞は社説をかかげて支援助し、年末にはまず神戸医大に一基入る。

同年7月続いて、市民同友会に十三日会という学際的な交流ゼミを発足さ

せ、アカデミックな場から離れて良い仕事をしている現場の研究者と大学人との活潑なディスカッションの展開をはかった。これは50回続き、私の33才から38才の間にわたる。互いに初対面の多彩な領域の人たちを集めては、十三日会をひとつの接点として話し合いを続ける。市民社会の中で、専攻や、イデオロギイを異にする研究者の討論の限界を確かめようという気負いもあった。

本業の大阪社大は何しろ人手不足、入試は英語を担当したが、ひとりで出題、印刷も協力、採点で徹夜という状態だった。そこへ産業福祉学科増設（昭和27年〔'52〕）が実現、それまで社会事業実習先の確保にかけずり廻っていたが、今度はさらに受け入れ先が少なく苦勞する。若さと、おっちょこちょい精神が旺盛だったせいもあって、こうした開拓的な仕事を次々買って出たきらいもある。

産業福祉の就職開拓は最も苦闘したところで、教授昇格後も万年就職委員長だった。一時は、中小企業を虱つぶしに頭を下げて歩いた時期もある。

VIII. 紀元零年

昭和28年（'53）1月8日、二男玲介誕生。

昭和29年（'54）8月4日、三男洋介誕生。その9日後の8月13日、長男俊介を神戸医大病院で喪う。満4年10か月のあどけない生涯を闘病3週間余で断ち切られる。正確には、病気の苦痛というよりは、治療による苦痛であったろう。早期発見した肺炎双球菌性脳膜炎を治療、これはほぼ全治したのであるが、腎盂炎を腎炎と誤り嚴重な食事制限をするなどの医療過誤が重なって、最後は心不全を起した。医師に厳命された水分禁止を守る私に「パパ、お水ちょうだい」と精一杯の声をふりしぼって哀願する幼い声は、今も耳底によみがえって苛責となる。三男出産後のことであり、妻にとっても最大の試練であった。

実在の神や、死後の霊の存在を私は信じ得ない。受洗者ではあるが無教会派に近く、無神論的キリスト者ともいべき立場で、私の神は理念としての神、神に祈らざるを得ぬ人間の実存をこそ信ずる。死後の霊の存続を信じ得た

らどれほど幸せであろう。

医療過誤の真相は或る経緯で証明されたが、悲憤はやがて医学研究、医療体制そのものへの疑問となり、社会医学へ一歩踏み込む契機をなした。君の疑問に、医学者、医師という専門的立場からの回答を求めるよりも、まず君自身が市民の立場を貫くべきだ、医学者、医師も市民であり、市民であるという共通基盤にあって、君は彼らと対話すべきだという意味のアドバイスを或る医学者から得た時、私は眼から鱗の落ちる想いを味った。

この時私は34才、第五福竜丸が死の灰を浴びたあの長く暑い夏であった。私は自分の人生が、改めて紀元零年を迎えたと感じる。

大阪社大ではカリキュラムの改変が頻繁で、別に専任者を得て英語からは解放されたが、科目細分化の時代とて、キリスト教思想史、レクリエーション論、新聞学、労働教育論など、さまざまな授業を、次々担当することになる。新聞学を持つからにはと、神戸新聞社で実習をやらせてもらう。夜の警察廻りから、配達まで体験する。

昭和30年（'55）12月5日、長女まどか誕生。

IX. 綿ばこの詩

民主化の中にあっても繊維産業の女子年少労働者の実態は、「女工哀史」以来の日本の労務管理のダークサイドを色濃く残していた。調査、講演などを通じ、雇用者側とも、労組側とくに全織同盟ともコネをつけながら各地の工場を訪れていたが、その行動半径は急速にひろげられてゆく。

鐘紡、東洋紡、倉紡などは全工場を幾度か巡回した。前後10数年の間に北海道から九州まで紡績関係だけで、おそらくのべ約1,000をこえる工場を訪れ、必ず女寄（^{じよき}女子寄宿舎）で話合い、会社療養所まで訪ねた。生活文化運動を女寄中心に展開。「お稽古事か、サークルか」「お茶、お花か、世界近代小説50選か」（読書の基準化運動に関連して）などの標語、服部プランの憲法結婚式デモンストレーション。生活記録運動の職場への浸透をはかり、働く人々の無名の詩を発掘、ラジオ放送でもさかんに朗読する。

私自身熱に浮かされたような按配で、先番、後番、昼専と呼ばれる交替番と社宅までを対象に入れ、1日2回、3回の講演と座談会を試み、休日、休暇のほとんどをつぶす。ていねいにおじぎして室を出ていった少女工の座ぶとんの上に残る綿ぼこ、すえた匂いを放つ蛹のかけら、ほの白い羊の毛のまつわるオーストラリアの牧草の実、湿りを含んだパルプの一片——それらは、私の日常性に混在する呪物のごとくであった。

今も、僻地の農村や山村で、民生委員になったり、婦人会長をしたりしているかつての娘さんたちから手紙をもらうことがある。

農業改良普及事業の生活改善運動ともかかわる。いわゆる生活合理化に批判的な構えをとりながら、しかしこれを手がかりのひとつとして、農山漁村も訪れる。四宮学長を代表者とする文部省科学試験研究費補助の農村調査（昭和29年〔'54〕以降）に参加したことも勉強になった。

大阪社大の女子卒業生から、次々紡績会社の女寄世話係、工場学園教員を送り出す。深夜、長距離電話で彼女たちの職場の悩みの訴えを聴くことも少なくなかった。しかし、その後の大状況の変化を経て、今あの頃の行動のすべてがむなしいような寂寥感を禁じ得ない。

それに日本のアカデミズムの中では、講演を何となく軽んじ、時にいやしめる雰囲気がある。欧米では必ずしもそうではない。キリスト教伝道の伝統もあって、民衆への語りかけに全霊を傾けた講演記録は、啓蒙的でありながらその志は高く、時に芸術的品位を保ち、多くの学者の全集にもおさめられる。私も講演者の誇りを失うまいと、しいて自分にいいかせてきた。

昭和33年（'58）売春防止法罰則規定実施を目前に、遊廓業者の説得活動に奔走。

昭和34年（'59）40才。「ソーシャル・グループワーク」を出版。

7月、家島群島総合学術調査団に参加。現地でも名誉団長三笠宮崇仁親王と対談放送。宮は参謀本部時代、同じ部に参謀として服務しておられたので、私の方はよく知っている。（むろん、戦時中の最末端の一囑託だから宮のご記憶にはなかった。）

大阪社大は8月、夕陽丘学舎に移転。

X. 悲しい血，高貴な血

翌昭和35年が60年安保、大阪社大も燃えた。三池争議、浅沼暗殺。

この夏、医学博士の学位請求論文『月経休暇請求権の産業医学的ならびに産業社会学的考察——いわゆる「生理休暇問題」の解明のために——』の主要部門執筆のため、ホテルに2週間こもる。昭和27年（'52）発表の「生理休暇問題の社会的考察」を充実させれば良いと、神戸医科大学古沢一夫教授からお励ましを受けたこともあって、取り組む。教授の産業医学教室に出入りした頃は懐しい。

このテーマは全国的女子労働者との交流の中であたためられたようなもので、旧制帝大の社会医学的産婦人科学の権威による古典的論文や調査が、いかに彼女たちの生活実態から、かけ離れたところで作られたかに気づく。私の出生の大正8年（'19）、ILOは婦人労働に対する保護について問題提起をしているが、当時の日本の体制はそのほとんどすべてを黙殺した。そして、その体制を支えたのが、これらの御用学者であったのだ。

論文は12月に完成、私家版として刊行。産業社会学にウェイトをおいて、文博の論文にしてはという声もあったが、何としても医学で提出してみたかったのは、俊介の死後、社会医学の世界に発言の場を持ちたくなったからである。

11月、大阪社大で日本社会福祉学会大会があり、論文の一部を「生理休暇問題の産業福祉的考察」と題して発表。

翌年のことになるが、学位審査要旨の一節。「本論文は半世紀にわたる女子労働者の月経研究の文献、資料、統計などの再検討を通じて、従来有機的に協力させることの稀であった医学と社会科学との、両者の立場からする考察を、自由に視点を交流せしめながら、総合的に研究を進め、産業医学上における社会科学的の方法の導入のしかたについてひとつの試みを示した。」（主査 古沢一夫、副査 松島周蔵、喜田村正次）

なお、この研究は、性の問題への道をひらき、私は性教育にも手を染めることになる。

さて、学会発表の1週間後に、三男洋介は先天性両眼内斜視の手術、これよ

り断続的に長期間視能訓練のリハビリテーション。日本では未だ研究初期の段階にあり、さまざまな苦渋をなめつつ、リハビリ問題にかかわる。小学3年大阪医大入院中は全家族が、不在の洋介中心に生活した感じ。最終的にリハビリは不成功となるが、この間の経過は「視能矯正の原点」（林博文博士）と題して発表され、本人も私も手記を寄せる。私の視能訓練への強い関心は講義に反映、その後大阪社大卒業者から数名の視能訓練士があらわれる。

60年安保の年は、あらゆる意味で多事であった。学生の中に生活記録研究サークルを育てたのもこの年。かつて機関紙コンクール審査を続けた頃の経験を生かし、壁新聞も指導。文芸部、聖書研究会、その他いろいろな部、クラブ活動に協力したが、生活記録サークルはとくに印象に残っている。

余事ながら、東奔西走、たまの在宅時には原稿執筆で、子どもたちの遊び相手になってやるゆとりも乏しかったことは、今も心残りになっている。

昭和36年（'61年）——「あどけない血、弱いものの血、悲しい血、かけがえない血、高貴な血——どの血も、黄色い皮膚から流れた血も、黒い膚からふき出た血も、どの血も、ひとたび外に流れ出た血は、決して、決して、皮膚の内側へもどることはできない。血は流すまい。血だけは流すまい。」（声なき声市民の会への年頭アピール）

3月、神戸市灘区青谷町3丁目4番8号の現住所へ移転。

4月16日、教授昇任、42才。（資格審査の担当科目は助教授の場合と同じ。）この後、産業福祉学科について責任を負うことが多く、また就職、学生々活などの委員長にも頻繁に選出された。

また懸案の校歌、校旗制定も実施。小野十三郎、芥川也寸志両氏のコンビ実現のため奔走。

昭和39年（'64）2月、橋爪恭一学長の後任に林恵海博士当選、選管委員長として懇請をかさねたが辞退される。伊藤学長就任。学長選のつど選管責任者となり苦慮する。

父、竹内玄、2月14日召天。学長選出問題のさなか。

XI. 孤独な時間

昭和30年（'55）代から、40年（'65）代にかけて、社会福祉とくに母子福祉、児童福祉、更生保護関係。また社会教育では西宮市の公民館群の黄金時代が続き、公民館への出講頻繁。昭和42年（'67）文部省全国婦人団体研究集会で講演、近畿、北陸、山陰、四国、九州などの婦人大会、婦人学級生大会等への出講の機会もふえる。

放送は昭和20年（'45）代からNHKラジオを皮切りに、しだいに出演頻度が高まる。NHK婦人学級で京大の重松俊明助教授としばしば組む。（後年、学長にお迎えしたいと決心する機縁は、その頃から用意されていたともいえる。）昭和33年（'58）頃からのJOCRの「今週の話題」、34年（'59）頃からのMBSの「あなたがひとりである時に」は、共に長年月にわたるレギュラー番組。

テレビ放送ではNHKのほか、昭和33年頃よりYTVの「科学教室」で湯川秀樹博士その他と対談、このほか朝山新一博士ともコンビを組む。後には“イレブン”（11PM）のゲスト出演等しばしば。MBSテレビのレギュラー番組も次々とあった。昭和50年代（'75）はOBCなどのレギュラーがふえる。

近年は放送のレギュラー出演、新聞の記事連載などは時間が惜しく、縁を絶っているが、マスコミの構造的な諸問題について体得できたことは収穫であった。

昭和31年（'56）代からラジオ評（新聞連載）も長期間。日本民間放送連盟賞関西地区審査委員も連続。

昭和40年（'65）46才で、放送約1,000回、大学の講義以外の講演約4,000回、放送、講義、講演内容を原稿紙に換算すると約30万枚、講演の聴衆は約100万人をこえたと記録している。むろん、休日以外は大阪社大の職免（職務に専念する義務免除願）を提出、休講は必ず補講、教授会は皆勤であったから、当然余暇は皆無に近かった。

こうした東奔西走は、慢性の時間飢餓、スケジュール地獄にあえぎ続けるの後半生への導入となる。しかも、無償か、それに近い条件だったり、講演料をカンパして帰るような対象が極めて多く、いわゆるタレント学者と似ても似つ

かぬ楽屋裏だった。一隅を照らすものの貴さとはおよそ縁遠いが、しかも百筋の道に分け入っては、それぞれの隅を照明しようというような妄想にとりつかれていた。

昭和40年には神戸市立上筒井小学校PTA会長となり、社会教育関係団体としてのPTA活動の実践と地域の交通安全対策のため努力。5か年計画でモデル地域化。葺合区（現中央区）PTA連合会長も。同46年（'71）前後、神戸市内全区PTA指導者研修。同48年（'73）松蔭高等学校PTA会長。

昭和45年（'70）大阪社大付属図書館長兼務。51才。学生との間に、同30年（'55）代末より“学則を守らぬ闘争”等断続的に起り、学生委員長として交渉の矢面に立つことも多かった。付属図書館長就任の年度にも紛争。連日、深夜まで、時には早曉までの教授会。

この年10月、伊藤学長任期途中で辞任、重松俊明先生（当時、佛教大学教授）を後任に選ぶ。しかし就任は翌年3月まで持ち越しとなり、緊迫した空白期を碓井隆次教授が学長職務代理。碓井先生とたびたび京都へ交渉に。静かな修羅の中であって、二人、それぞれの孤独な時間の重圧を、南禅寺の奥丹の夕照の庭をながめつuitたわり耐えた思い出も今は遠い。

学内にさまざまな問題続出の季節であったが、岡本重雄先生のおすすめで、「女性心理学」を執筆。（昭和46年〔'71〕出版）

同46年2月15日、妻の父、服部誠一召天。

昭和49年（'74）3月31日、兼付属図書館長任期満了。

その前年（昭和48年〔'73〕）神戸市立中央図書館・博物館等調査委員会図書館部会長となり、中央図書館再建についての答申書（同50年〔'75〕）、意見書（同51年〔'76〕）提出まで、いわゆる三多摩図書館群を始め多くの公共図書館につき調査の機会をあたえられた。現市立中央図書館はこれにもとづく、政令都市で最初の三多摩型の中央館である。

XII. Vita trivialis./

幾人かの先進の略伝に共通しているのは、生涯の活躍期に入り、或いは劇職

につくと共に、割かれる紙数の少くなることだ。「広汎な講義領域を受け持ち、あまりにも忙しく十数年もいつの間にか過ぎた」と極めて簡略に要約された自伝の例もある。時に発令事項のみが列挙されている。

実は、私も僭越ながらこうした先達のひそみにならわざるを得ないようである。但し、活躍期というような意味ではさらさらないが、ただことが多過ぎる。おのれのスケジュールで我が背を突きとばされ、よろめきながら走り続ける。日夜は、青年期からのならいとはいえ、いよいよ苛酷そのもの。時間飢餓にあえぎながらの40代後半以降であった。

本務以外の“事項”の一端を抄出列挙しておく。主として昭和40年（'65）以降を中心とするが、部分的には多少さかのぼる。（発令順不同。*印は元。）

公職・法人役員——大阪府谷町福祉センター理事長、灘神戸生活協同組合理事、関西カウンセリングセンター理事、こうべ市民福祉振興協会理事、神戸市民文化振興財団理事、大阪精神衛生協会理事、市民同友会理事、その他。

自治体委員等——大阪府社会教育委員、大阪府行政書士試験委員、大阪府婦人問題推進会議委員、大阪府明るい選挙推進協議会委員、*大阪府児童福祉審議会委員、*大阪府学校教育審議会委員、*大阪府青少年問題協議会専門委員、*大阪府テレビ教育研究会委員、*兵庫県教育問題研究協議会長、*兵庫県労政懇話会委員、*兵庫県ともじびの賞選考委員、神戸市住宅審議会長、神戸市同和施策住宅家賃検討委員会副委員長、神戸市婦人問題推進懇話会長、神戸市保育所用地貸付選考委員長、神戸市市民福祉調査委員会小委員長、神戸市心身障害者対策協議会委員、*神戸市社会教育委員、*神戸市総合基本計画審議会福祉文化部会長、*神戸市中央図書館博物館等調査委員会図書館部会長、*神戸市文化賞審査委員長、*神戸市道路愛称懇話会委員、*神戸市ポートアイランド博覧会テーマ委員、*神戸市市政専門委員、その他多数。

諸団体役員等——*日本社会事業学校連盟副会長、神戸芸術文化会議々々長、Qの会々長、*ラジオ関西放送番組審議会委員、*日本民間放送連盟賞関西地区審査委員、*井植文化賞審査委員、その他多数。

講師——*同志社大学文学部、*神戸山手女子短期大学、神戸市立看護短期大学、その他。

学会々員——日本社会福祉学会、日本社会教育学会、日本産業教育学会、日本近代文学会、*日本英文学会。

団体会員——日本ペンクラブ、思想の科学研究会、半どんの会、その他。

受賞——昭和40年（'65）11月、西宮市教育功労者表彰。同43年（'68）2月、兵庫県のじぎく賞。同45年（'70）11月、大阪府社会教育功労者表彰。同47年（'72）11月、社会教育功労牌（社会教育協会）。同52年（'77）12月、半どん功労賞（芸術文化団体半どんの会）。同53年（'78）9月、神戸市文化賞。同55年（'80）5月、文部大臣表彰（短期大学功労者）。同56年（'81）11月、兵庫県社会賞。同57年（'82）5月、大阪府大学教育功労者表彰。

——昭和50年（'75）年代（50代後半）以降の“一身上の事項”を抄出すると、まさに集中的で、昭和52年（'77）二男玲介、京都大学経済学部卒（前年“自主留年”渡米）、三男洋介、上智大学文学部英文学科卒、共に就職。同53年（'78）1月、フランス、イタリー旅行、長女まどか大阪音楽大学声楽学科卒、私は12月ホンコン、シンガポール、マレーシャへも旅行。同54年（'79）1月、神戸労災病院入院、結腸の手術。9月、中国へ神戸市よりの友好訪問。同55年（'80）2月10日、玲介、河野みさ子結婚式、5月11日、まどか、立野博久結婚式。9月、台湾旅行。

同年12月6日、妻の母、篤信の女性ふじ胃ガン手術後急変して召天。（俊介の場合と同じく衝撃を受け痛悔。現代医療への深刻な疑問。）

同56年（'81）1月22日、玲介、みさ子に長女星香誕生。（3月1日、大阪社会事業短大学長就任。）8月2日、洋介、檜岡尚美婚約式（海外で結婚式）、同57年（'82）4月24日、洋介、尚美に長女麻衣子誕生、9月22日、玲介、みさ子に長男佑介誕生。

実はこの貧しい自略譜を *Vita trivialis*（ビィタ・トリビアルリス）と命名するつもりだった。「心忙しきより禍なるはなし」というが、瑣末な雑事に忙殺され、枝葉末節、トリビアルなつまらぬ日常性に埋没し、退廃した世俗的生活というほどの自嘲をこめて……。瑣末事にこだわって過した人生という意味の私の造語である。しかし、ラテン語にあまり自信はない。

昨年暮、ジャン・メルオー神父にご馳走になった。オルガニストであり、グルメとしても高名な粹人聖職者。ワインをあけるたびに頑固なプロテスタントと神学問答を闘わすような気難かしい表情で、まずコルクの栓に浸みた匂いから慎重な吟味を開始する。そこで私が、Vita trivialis という題名を口にしたとたん、神父は最下等のワインを含んだような渋い顔になった。「いけません。それは美しくない。止めておきなさい。」私は狼狽した。「自嘲ですよ、謙遜であってもですか。」青い眼はまっすぐ私を見据え、はね返すようにきめつけた。「穢い、臭い！」

私は、その夜のおごり手に敬意を表し、この題名を撤回することにした。しかし彼の断言した意味でこそ、私は近年の自分自身を総括したいのだ。（むろん私が頑固なプロテスタントであるはずもないが。）

XIII. 深夜の桜

昭和52年（'77）大阪社大は岡村重夫学長を迎え、府大への合併昇格へ転舵。重松前学長は単独昇格論を固守されたが、客観状勢の変化と共に合併推進の機運濃厚。（以下、一部前項と前後重複するが、年譜風に列挙すると——。）

同年4月1日、大阪府谷町福祉センター創設と共に理事長就任。

同53年（'78）9月、神戸市文化賞受賞。11月、祝賀会（生田神社会館）

同54年（'79）四年制化準備委員会副委員長、60才。

同55年（'80）創立30周年、岡村学長の陣頭指揮下に、文部省への昇格申請。

同年5月、文部大臣表彰を受ける。

同56年（'81）1月、大阪府立大学社会福祉学部設置認可。（福祉系学部は国公立を通じ日本最初。）同年2月末、岡村学長ご勇退。

同年3月1日、大阪社会事業短期大学長、兼教授、兼大阪府立社会福祉事業研修所長就任。

同年4月1日、大阪府立大学社会福祉学部開設、大阪社大教員半数は府大兼務、新学部との合同教員会議発足、議長をつとめる。事務職員は全員府大と2枚辞令、複雑な辞令交付。府大、府企画部、文部省、厚生省との折衝、公立短

期大学協会、日本社会事業学校連盟等との協議に濃密な日程が続く。

同年7月、創立以来8年間常任委員をつとめていた神戸芸術文化会議々長に就任。

府大と大阪社大は同じ府立ながら制度的には別組織であるから、前身校以来の大阪社大の人事関係を始め、すべての内容を完璧に府大へ引き継ぐことが、合併の大前提。文部省、府知事、府大学長とその点の合意、確認、複雑煩瑣な行政的处理に万全を期すだけでなく、大阪社大建学以来の学風、社会福祉への開拓的精神の伝統を正しく発展的に新学部へ継承、名実共に統合化し、さらに将来への飛躍をはからねばならぬ。

併設の府立社会福祉事業研究所も最後の修了式、廃所と同時に大阪府社協の研修センターへの移管手続きなどを並行する。社会事業学校以降の血脈はここにも継承されてゆく。

同年11月、兵庫県社会賞受賞、12月、日本社会事業学校連盟副会長就任。

昭和57年（'82）3月17日、大阪社大最後の卒業式、「今こそ、諸君の母校は歴史上の不滅の存在となる」と式辞。3月31日、最終の合同教員会議、午後3時廃学式。式後、大阪社会事業短期大学各誉教授の称号を受ける。深夜まで残務整理。

翌4月1日、大阪府立大学教授発令。短大廃学まで在籍した同僚と共に社会福祉学部移籍。早朝、岸昌府知事を公舎に訪問、ついで稲葉哲雄府大学長に引継書。知事、学長共、前身校のいっさいを府大が完全に継承することにつき、かさねて力強く約束していただく。学部では社会福祉学演習担当。

「大阪社会事業短大34年史を閉じて」と題し、新聞の求めに応じた寄稿から抄出しておこう。「西日本で社大といえば、大阪社会事業短大のことであったが、その名称も歴史上の存在となった。国公立を通じ福祉系では昨春まで大阪府立のこの短大が唯一の最高学府であった。国が教師や医者にくらべ、いかにこの領域で人材養成から手を抜いてきたかがわかる。

^{びょう}渺たる一短大ながら、制度の枠を超えた社会的役割りを一時期、担ったことは確かだ。「クライアントこそ我が師と思え」とは、卒業式の式辞で私のくり返した言葉である。

昇格統合により新学部到校風を血肉化すべく、最後の学長として前身校以来34年の幕をおろした廃学式の夜、校庭の桜並木の下にたたずんだ時、戦後の苛酷な福祉現場に若くして殉職した幾人かの教え子の懐かしい顔が次々と闇の中に浮かんで消えていった。

私は戦後の本格的な福祉教育制度に生涯の過半をかさねたことになる。その人生の重さ、深さにおいて多くのクライアントにおよばず、その人生の激しさ、純粋さにおいて、これらの教え子に遠くおよばない。なお道は遠い。」

XIV. 「人魚は、その時」

昭和58年（'83）3月31日をもって、大阪府立大学教授の定年。63才。大阪府大学教員の身分32年11か月、大阪社大創立以来非常勤通算33年11か月、参謀本部以来の公務員通算38年5か月、私学も含めての教育研究職通算38年8か月に達する。私は寛容に甘えて歳月を過してきた。

かつて大阪社大の創立30周年記念に際して、したためた通り、数多くの教職員、そして学生諸君、ここに来り、ここを去って行ったおびたしい人々、それらの群像によってになわれ、体現された思い、いとなみ、働らき、おしなべて懐しく、暖く、ありがたく、貴重である。

最後にこの自分史の要約を試みると――。

(i) 研究者としての主要な発表活動については、研究業績目録に抄出したので、ここではほとんど触れていない。但し、資質としては評論家的活動を通じての表現の方が向いていたのかも。

社会福祉学、社会問題、社会医学、文化論、文学論と、いわば幾条もの細々とした探求の河川が、一見相互の脈絡なく、乏しい水量で走り、時にはそのひとつが奔流となって我と我が身の岸を脅やかす恐れもいただいた。ただ、それらの河川の発する山系はどこと聞かれれば、文学の山と答えたい。それならお前の貧しい学芸の河川はどの海原へ流れこむのかと問われたなら、沈思の末、再び文学の海へと答えるほかない。年と共にその想いは深まる。

生来私は合理主義的思考からおよそ縁遠い、感覚型の人間である。思念の大

半は揺れ動く情緒の潮に漂っている。社会科学へと志したのも、心情のままに、ゆらゆら息づくばかりでは、どこへ迷い込むか自分が恐ろしくなったからだ。日常の発言は、どうかすると論理的に響くらしいが、実はみずから合理性を装って規制せぬと、中身が流れ去っておのれの正体もとらえ難くなるからで、合理性は偽装に過ぎぬ。たとえば社会医学さえ文学的次元においてしか考察できなかった。青年期の私を轟惑^{わこく}した弁証法的唯物論の無謬性は、世界史の大状況の変化と共に、中年期の私の中で無惨に剥落し、遂には崩壊し去った。

私を福祉にかかわらせたのは、人間に対するインタレストであり、インタレストの志向するところは、文学の培うはずの全人間像、いわゆるトータルな人間像である。「福祉は文化なり」は若い時からの標語であり、「福祉の美学」という私だけのあたためてきた理念（？）がある。

英文学とくにアメリカ文学専攻から出発、同時代史とその文化、社会への関心が、労働問題へ、そして労働文化、生活文化へと自分を導く。それが昭和20年（'45）代、20才代。やがて、労働現場から福祉現場へ、方法論的にはグループワーク論へ、分野論的には産業福祉論へと凝縮しつつ、30才代を過す。産業医学、社会医学への興味も湧く。しいていえば学際的志向そのものが私の専攻である。

専門分化による分断管理への反省、施設中心主義の克服から反隔離、反差別的価値観、そして統合化、コミュニティ・ケアへの展開という径路も、もともとインフォーマル・グループ、インター・グループの実践的ソーシャルワーカーでもあった私として、自然の成り行きに近かった。

(ii) 教育者としての歩みは、研究者と不即不離であるが、社会教育家としての側面を別として、ここに大阪社大（本科、専攻科、選科、併設研修所も含め、）関係担当講義科目を記録しておく。時代と共に科目の細分化、統合化のうねりがあり、科目名の変遷の跡がうかがわれる。（1回しか開設もしくは担当しなかった科目もある。*印は大阪社大最後の担当。）

—社会事業技術論、社会福祉方法論、*ソーシャルワーク論、グループワーク論、児童グループワーク論、レクリエーション論、社会福祉学演習、社会福祉特講、社会問題特講、*産業福祉論、労働教育論、*労働文化論、医学知

識、キリスト教思想史、新聞学、*文学論、英語、社会事業実習、産業福祉実習。

主力科目のグループワーク論については、小論「教科としてのグループワーク論——その30年史」を参照されたい。

校内活動の中、常任委員長としては、企画、教務、研究、図書館、学生（補導、厚生、学生々活）、就職（就職企画）、入学試験の各委員会、産業福祉分科会。特別委員長としては、資格審査（採用、昇格）、学長選挙管理、四年制化準備、その他。

苦慮するところが多かったのは人事と紛争時の学生問題であり、そのつど“人間のすること”の限界を思い知らされた。

(iii) ソーシャルワーカー、やや古風に社会事業家としては、前半多くの社会福祉施設にかかわりつつ、時にはソーシャル・アクションを起す。公害、薬害問題、草の根的住民運動にも関心を寄せる。後半、福祉行政、コミュニティへのインテレッセを強める。分野的には、児童、母子、婦人、心身障害者、老人福祉、更生保護、農村社会事業、労働、産業、地域福祉それぞれ、何らかのかかわりを経験してきた。とくに心身障害者福祉や高令者福祉との関係は今も日常的に濃密である。生協運動も同様。

福祉のあらゆる相、無数のケースに接し、深い谷底をのぞきこみ、さらに新たな深淵を発見し、めまいをもよおす想いもしばしば。

私が社会的問題に敏感になりがちなのは、これに対応するイデオロギイによってのことでなく、私の美的感覚への背理が不快だったからだ。公害ひとつをとってみても、醜悪だからいやなのだ。私の是とするモラルに反するから憎むというより、むしろ感性を侵蝕されるから嫌悪する。その意味では私はエピキュリアンなのかも知れぬ。（また、メルオー神父が顔をしかめそうだが）

福祉は人間の美的感性に最も根源的にかかわることをいっておきたい。よし利己的なエピキュリアンであるとして、だからこそ耽美の妨げとなるいっさいの地獄の存在を拒否したい。その地獄の極限は戦争であり、戦争の反対概念は福祉だ。福祉は日常性の保障であり、最も非日常的なものこそ戦争である。

(iv) 文化運動家、社会教育家的側面については、比較的くわしく触れてき

た。社会教育における福祉教育、西欧流の福祉と社会教育の一体化については実践的試みをかさねた。

——要するに、自分史としては「片隅の同時代史」のさらに一側面の記述に終始したに過ぎない。

1月22日、府大教授として最後の記念講義では、小川未明の「赤い蠟燭と人魚」を中心に『人魚は、その時——或る「近代」の反差別観』と題し、時空を超えた悲しみと怒り、その美しさを語った。私のこれまでの生涯は、“その時”の人魚の嵐のエネルギーに比較すべくもない微小な、“時間の腐敗物”に過ぎぬ。

無教会派に近い受洗者、いかなる政党にも距離をおく無党派、そしてかつてどのような学閥、会派にも属さず、同人になったこともなく、しいていえば衰残の無頼派、数限りない人々のご恩情によって辛うじて今日ここにある。

大過なくとは退任の辞の常套語である。だが、教育や福祉にたずさわる者は、常に人間の運命を直接的に左右する。私もまた、おのれの未熟から、或いは凶らざる錯誤から、いつ知れず人々の運命を狂わせる愚行をかさねてきたのではないかという恐れが、心の底に冷水塊のごとく潜んでいる。

時には、私という存在そのものが、許し難い“大過”ではなかったか、という疑念をさえ禁じ得ない。

なお、同58年4月1日より松蔭女子学院大学客員教授として、私の研究の総括ともいべき興味ある新設科目「社会福祉と文化」ならびに「女性論」担当の機会をあたえられたことは、望外の喜びである。

（昭和58年〔1983年〕3月31日）